

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17245

研究課題名(和文)「定式化」作業の相互行為分析に基づく介護職員の専門性の確立

研究課題名(英文) Establishing care workers' expertise based on interaction analysis of 'formulation' practices

研究代表者

城 綾実 (JOH, Ayami)

滋賀大学・教育学部・特任講師

研究者番号：00709313

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、介護職員の社会的地位向上に貢献しうる相互行為実践の分析を行うことと、その研究プロセスの鍵となる身体的・物理的資源の分析的観点を提案することを目指すものである。グループホームの介護職員による利用者(認知症高齢者)の状態についての報告に着目した分析、および、相互行為におけるジェスチャーの同期に着目した分析の結果、会議中に介護職員たちが理解共有のために行っている実践の一端を明らかにし、相互行為における身体的・物理的資源の分析的観点としてジェスチャーの粒度や強弱に着目することを提案した。また、身体的・物理的資源の相互行為的探究に資する知見および分析的課題の提示も行った。

研究成果の概要(英文)：This research aims to analyze interactional practices in order to be able to contribute to improve the social status of care staff and to propose analytical viewpoints for investigating physical and material resources that are key to this research process. Analyses focusing on reporting on the state of residents (elderly people with dementia) by care staff at a group home and analyses based on gestural matching in interaction reveal a part of the practices that care staff are doing to share understanding in the meetings, and then this research proposes to focus on gestural granularity and a stress or a tension of gesture as an analytical viewpoint of physical and material resources in interaction. This research also shows some findings and analytical issues to contribute to the research of interaction for investigating physical and material resources.

研究分野：社会科学

キーワード：相互行為 会話分析 理解共有 グループホーム 構造化 身体的表現 ジェスチャー 粒度

も1. 研究開始当初の背景

(1) 相互行為における「定式化」

人は、発話を通じて行為を達成すると同時に、「自分が今、特定の対象をどのように扱うのか」を示す。これを社会学に基盤を持つエスノメソドロジー・会話分析では定式化 (formulation) と呼ぶ。特定の対象をどう扱うかを明示すること、すなわち定式化作業は、発話者の思考に閉じた課題ではなく、相互行為上の課題である。これまで、場所、時間、人物についての定式化作業が分析され、発話者が定式化された対象への関心やスタンスを受け手にどう示すのかが明らかにされてきた。特定の対象の定式化は、社会生活の秩序を維持するための技法の解明にとって重要な課題であるだけでなく、エスノメソドロジー・会話分析が掲げてきた通り、日常生活を営む人々にとっての課題である。これらの課題を解決すべき場である人々の生活世界は物質的な資源に満たされており、人々は身体を通じて世界とかがかわるにもかかわらず、実際の相互行為上で身体的・物質的資源が定式化にどのように利用されているかについて体系的に実証された研究はほとんど蓄積されておらず、発展が望まれている。

(2) 身体的・物理的資源に着目した相互行為分析の観点：物理的構造と規範的構造

会話分析では、発話の形式的特徴と相互行為の関係性についての分析は盛んに行われているが、それと比べると身体的・物理的資源の形式的特徴と相互行為の関係性は蓄積がまだ乏しく、発展が望まれている。

発話の分析と同様に、身体的・物理的資源に焦点化する場合も、発話の順番交替、行為連鎖といった会話分析の基本概念に基づいて分析を進めることが一般的である。しかし、身体的・物理的資源の時空間的特徴を精査するためには、それ以外の分析的観点も必要になってくる。

身体的・物理的資源の時空間的特徴を精査するために有用な観点として、日本の会話分析の第一人者である西阪仰が指摘している「状況に応じた構造化」がある。この構造化に利用される身体や道具の構造には、少なくともふたつの区別可能な性質がある。ひとつは、対象の長さや大きさ、形状といった特徴をその構造から見出すことができるような物理的性質。もうひとつは、「頭が上で足が下にあるのが普通である」といった身体または道具が内在的・本来的に備えているべき特徴をその構造から見出すことができるような規範的性質。これらの性質が、相互行為をする者たちによってどのように利用されているかを明らかにすることは、相互行為の基礎的・応用的研究にとって重要な課題である。

(3) 相互行為的实践にもとづく介護職員の専門性の確立

応用言語学者の C. グッドウィンは、会話

分析を用いて、専門職従事者 (たとえば考古学者、法廷における専門家証人) の言動から、専門職に宿るものの見方を明らかにした。C. グッドウィンが示した分析的な考え方は、さまざまな職業場面の分析に応用できるだけでなく、職業現場が抱える社会的課題にも貢献しうる。

たとえば、介護職員の専門性を社会的に確立することは、現場の環境改善や労働条件の向上を図る上で喫緊の課題である。介護職員は、身体的・物質的資源を動員して相手との心の通った交流とケア実践などの専門的なかわりとを両立することを社会的に望まれている職業である。特に認知症高齢者対応型施設であるグループホームは、家族のようなふれあいの中で日常生活や健康上のケアや見守りを担うという、今まで明確に論じられてこなかった種類の専門性を要求される場である。特定の対象について、自らがどのように扱うのかを、身体的・物理的資源を用いて定式化するその実践の諸相を分析することは、学術的貢献と現場への貢献との両方に資すると考えられる。

2. 研究の目的

介護職員の社会的地位向上に貢献しうる相互行為実践の分析を行うことと、その研究プロセスの鍵となる身体的・物理的資源の分析的観点を提案することを目的とする。具体的には、グループホームの介護職員による認知症高齢者 (利用者) に関する定式化作業を研究対象とし、エスノメソドロジー・会話分析を用いて、多様な諸資源の様相、定式化の形式、行為連鎖上の位置、物理的・規範的構造について検討する。

3. 研究の方法

本研究課題では、グループホームの月例会議 (利用者一人ひとりの状態を共有し、ケアの方針を議論・決定するミーティング) における、利用者の状態を報告する場面に見られる定式化を対象とし、以下の手順を経て研究を遂行した。

(1) グループホームの月例会議の収録とフィールドワークを定期的実施する。

(2) 収集した映像データから利用者に関する定式化を行っている箇所を抽出する。

(3) (2) で抽出した映像データの断片について、会話分析的手法に基づいた音声発話と身体的・物質的資源を転記し、トランスクリプトを作成する。

(4) 定式化について、身体的・物質的資源の様相、言語形式、行為連鎖上の位置、物理的・規範的構造の各記述の妥当性を精査する (適宜、国内外の研究者とのデータセッションを実施し、分析の精度を高める)。

(5) 身体的・物理的資源に着目した相互行為分析の観点を妥当性を高めるために、研究代表者が長年分析対象としてきた相互行為におけるジェスチャー (身振り) の同期

(gestural matching) と呼ばれる二人以上で同じジェスチャーを同時にする現象にも適応できるか検討する。

4. 研究成果

グループホームの介護職員による利用者の状態についての報告に着目した分析、および、ジェスチャーの同期に着目した分析の結果、以下5点の成果を上げた。

(1) 迅速かつ正確な情報共有のための発話の重ね合わせを通じた報告の価値付け

グループホームの利用者の身体的・精神的状態の報告時に、複数の職員による発話の重ね合わせ (overlapping) が生じる場面に着目し、分析した。その結果、発話の重ね合わせは偶然生じているのではなく、グループホームの理念や職能に関連ある形で行われていることが明らかになった。具体的には、状況に応じて、当該報告の価値を高める (今、報告すべき内容であることを、非報告者も支持する) 働きと、低める (報告内容を重要なものとしてこの場で共有しなくてもよいとみなす) 働きの、少なくとも2種類の効果を介護職員たちが使い分けていることが明らかになった。発話を重ねることは、一見、複数の発話が同時に行われるために聞き取りの問題が生じそうだが、実際は、迅速かつ正確な理解共有のための手段として月例会議の中で用いられていることが明らかになった (学会発表)。

(2) 定式化の種類と利用される物理的・規範的構造の関係

グループホームの利用者の状態を報告する際には、発話のみならず身体的表現を用いた定式化が多用される。この身体的表現を用いた定式化について、物理的・規範的構造に着目して分析し、次のような特徴があることを指摘した。まず、利用者の傷や腫れ、痛みを訴えている位置を定式化するときには、人間の身体が有する物理的な構造的な同形性を利用する傾向にある。次に、ケアをする介護職員の身体とケアをされる利用者の身体を同時に示しながら定式化するときには、物理的な構造的な同形成だけでなく、規範的構造を利用する傾向にある (学会発表)。

なお、身体や道具が有する物理的な同形成と規範的構造は、介護職員の定式化作業に限らず、相互行為における身体的表現を分析する際に考慮すべき重要な視点である。特に、人々が相互行為の展開を予測しながら活動に参加する際に利用していることを、ジェスチャー (身振り) の同期の分析を通じて指摘した (雑誌論文、図書)。

(3) 報告の構造と身体的表現を構成する粒度・強弱の関係

グループホームの利用者の状態に関する報告の構造と身体的表現の組み立てられ方

について、会話分析の創始者の一人である E. A. シェグロフが指摘した発話の粒度 (granularity: 詳細度と訳される場合もある) の知見をもとに分析し、次のような傾向がある可能性を指摘した。会議参加者に周知したいことや主張したいポイントとともに産出される身体的表現は、粒度が細かったり、手や腕に力が込められていたり、表現が繰り返されたりといった形で強調して組み立てられる。他方、報告の終了部とともに産出される身体的表現は、粒度が荒かったり、手や腕から力が抜けていたりといった、やや弱められた形で組み立てられる (学会発表)。介護職員が、報告の構造に即して身体的表現の組み立てられ方を変化させているとするならば、限られた機会の中で利用者に対する理解共有のための職業的実践のひとつといえるはずである。

(4) 相互行為の展開に利用される装置の探究: 身体的表現と知識差の関係

会話分析では、特定の言語形式や行為の組み立て方が、繰り返し利用される「装置」とみなされる。身体的表現についても、わずかながら研究の蓄積がある。たとえば、手が元あった位置から動き出して何かを表現した後、元に戻るといった一連の動きが、発話の構造とかかわっていることが会話分析の創始者である H. サックスと E. A. シェグロフによって指摘されている。この元位置 (home position) が、相互行為の展開に利用される装置というわけである。

本研究課題においても、定式化に利用される身体的・物理的資源の組み立て方において、そうした装置としての役割の探究を行った。その結果、ジェスチャーの同期について次のような傾向が確認できた。会話において特定の対象について、二人以上の知識を持つ者と持たない者の両方が顕在化したときに、知識を持たない者がその知識差を埋めるために知識を持つ者に対して情報提供を求める。それに応じようとようと一人が情報提供を始めるが、この提供時や提供直後になんらかの滞りやトラブルがあった際に、当人もう一人の知識を持つ者が、同様のジェスチャーを同時に産出するという傾向が見られる (学会発表)。この傾向については、データを増やしてより検討を深める必要がある。

(5) 身体的・物理的資源の記述や分析の課題と解決方針

相互行為における身体的・物理的資源を研究する際の課題として、身体的表現を組み立てる際の曖昧な非流暢さをどのように記述・分析するかについて問題提起を行った。聴衆との議論を経て、現段階において会話分析的に身体的・物理的資源を探究するには、相互行為者たちが互いの行為を理解・産出する際に、確実に利用していると証拠立てられる資源に絞って分析を進める姿勢が重要で

あることを指摘した（雑誌論文）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

城綾実、秩序だった手の動きが誘う相互行為 意味の共同理解を試みる活動を例に、『日本語学』36(4)、177-189、2017 年、査読無。

黒嶋智美・城綾実・杉浦秀行・牧野遼作・チブルカ パウル、第 36 回研究大会ワークショップ報告：発語・ジェスチャー・物理的環境の包括的記述に向けて 会話分析の可能性と課題、『社会言語科学』18(2)、76-81、2016 年、査読無。

〔学会発表〕（計 4 件）

Ayami Joh. How care workers manipulate levels of gestural granularity in reporting talk: Analyzing care meetings at group homes for the elderly with dementia, the 15th International Pragmatics Conference, 2017 年 7 月 20 日.

Ayami Joh. Epistemic imbalances drive gestural matching: Establishing sufficient answers in terms of managing progressivity of interaction and unknowing recipient's understanding, International Institute of Ethnomethodology and Conversation Analysis, 2017 年 7 月 12 日.

城綾実. ケアをめぐる実践：認知症高齢者グループホームにおけるケアカンファレンスの相互行為分析，第 42 回日本保健医療社会学会大会ラウンドテーブルディスカッション「ケアをめぐる相互行為分析の射程と可能性」，2016 年 5 月 15 日.

Ayami Joh. The organization of overlapping talk in care conference at group home: Interactive achievement of social situated activity, the 14th International Pragmatics Conference, 2015 年 7 月 27 日.

〔図書〕（計 1 件）

城綾実、ひつじ書房、多人数会話におけるジェスチャーの同期：「同じ」を目指すそうとするやりとりの会話分析、2018 年、総ページ数 226。

〔その他〕

【翻訳】

北村隆憲（監訳）・須永将史・城綾実・杉野遼作（訳）人間の知と行為の根本秩序 その協働的・変容的特性（著：チャールズ・グッドウィン）『人文学報』

513(1)、35-86、2017 年。

【アウトリーチ活動関連】

城綾実、「やりとり」の中の小さな積み重ね：私たちが突き動かすものを探して（Every Little Bit Counts in Human Interaction）Kyoto University iCeMS Learning Lounge #8、2016 年 7 月 28 日、京都大学物質 - 細胞統合システム拠点、<https://www.youtube.com/watch?v=zfu0yPICZ7g&t=4s>。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

城 綾実（JOH, Ayami）

滋賀大学・教育学部・特任講師

研究者番号：00709313